

【地域教育実践報告】

地域連携PBLの活動報告

——2022年度の主なプロジェクトの振り返りから——

勝浦信幸*

キーワード：ソーシャル・マネジメント、地域連携PBL、協創、主体的で深い学び、社会人基礎力

1. はじめに

城西大学経済学部勝浦ゼミ（以下「勝浦ゼミ」という。）では「ソーシャル・マネジメント（創造的地域経営）」を共通の研究テーマとし、様々な実践的な教育（PBL：Project Based Learning）に取り組んでいる。

「ソーシャル・マネジメント」とは、「ニュー・パブリック・マネジメントとソーシャル・マーケティングが結合したもの」（井関ほか2005）とか「マルチステイクホルダーのコンフリクトの最小化とマルチステイクホルダーの変容をマネジメントすること」（大室2014）などと定義される。さらに井関らは「ソーシャル・マーケティングとは、成熟した地域社会における需要サイドと供給サイドの同一化を踏まえた価値創造である」（井関ほか2005）とする。需要サイドと供給サイドの同一化というのは、ヴィンセント・オストロムがその編著「都市型サービス供給システムの比較研究(Comparing Urban Service Delivery System)」(1977)で著した「coproduction¹」とも共通する。V. オストロムのいう「coproduction」については、荒木昭次郎が「参加と協働」(1990)で日本に紹介したことにより、「協働」という言葉に訳されて日本の地方自治体に広まっていった。その後「coproduction」は、「協働」以外に様々な分野で「共同創造」「共同制作」などとも訳されている。

一方、2016年12月の文部科学省中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（文部科学省HP、2016）第6章及び第7章では、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」という視点に立って、「主体的で対話的な深い学び」のためのアクティブ・ラーニングの重要性について触れられている。そこでは「社会に開かれた教育課程」という理念のもと、地域社会との連携・協働による教育活動も求められている。また、大学に対して文部科学省は、「地域を志向した大学であること」「地域が求める人材を育成すること」を求めている（文部科学省HP、2013）。

このように「ソーシャル・マネジメント」は協働をベースとするものであり、それを研究テーマとする勝浦ゼミのPBLは、地域社会との連携・協働が不可欠の要素となっている。それは、城西大学の「協創」にも繋がり、ディプロマポリシーの「社会の多様性に配慮して主体的かつ協働的に実社会に貢献できる能力」の向上にも資するものであると考える。

* 城西大学経済学部特任教授

1 公共サービス効率化のために需要サイドである住民も共同生産者として供給サイドに参画するという考え。

本報告では、2022年度のこれまでに実施した地域との協働・協創による勝浦ゼミのPBLの中から3つの主な事例について、参加した学生たちの振り返りなども含めて報告するとともに、若干の考察と課題について述べたい。

2. 高齢者スマホ教室

2.1 概要²

【日時】2022年4月16日（土）及び4月30日（土） それぞれ13:00～16:30

【会場】鶴ヶ島市富士見市民センター集会室

【連携主体】鶴ヶ島市富士見地域支え合い協議会（市民活動団体）

【参加者数】各回高齢者35人 学生アシスタント（勝浦ゼミ生）35人 その他スタッフ約10人
各回計約80人 2日間でのべ約160人

2.2 経過と準備

まもなく3Gサービスが終了³するということで、いわゆるガラケーからスマホへの移行が進んでいる。使えなくなると聞いて慌ててスマホに買い替えた高齢者たちには、販売店などが開催するスマホ教室が用意されている。しかしながら、それらのスマホ教室は、時間も限られていて一方的（しかも有料）な講義であり、高齢者の求めに応じきれていないという声が多くあった⁴。このようなことを背景に、鶴ヶ島市富士見地域支え合い協議会事務局から「高齢者スマホ教室を企画したいが、学生たちに協力してもらえないか」との依頼があった。当初事務局では3～4人の学生アシスタントを期待していたが、勝浦ゼミで企画を練る中で3～4人では十分にサポートできない可能性があるため、参加高齢者数以上のアシスタントによるマンツーマンでのサポートが有効ではないかとの逆提案を事務局に対して行った。

ゼミ生全体にアシスタント候補を募ったところ、このプロジェクトにゼミ生35人から参加希望があった（このため高齢者の参加申込みの上限を35人までとした）。このメンバーを中心に、コロナ禍ということもありZoomやLINE WORKSを活用して、講師による事前学習や事務局等との情報共有をこまめに実施した。

参加者募集にあたっては、難易度レベルを4段階に分けて、第1回の4月16日は「甘口（レベル1）」と「ちょい甘（レベル2）」、第2回の4月30日は「ちょい辛（レベル3）」と「中辛（レベル4）」としてレベル分けをした。しかしながら、参加者は各自のレベルに合わせて申し込んだというより、スケジュールが許す限り、「甘口」から「中辛」まで全てに参加を申し込んだ。

2.3 当日

ゼミ生たちは、開始1時間半前の11:30に集合し、会場設営、事前打合せ、受付準備などを行っ

2 <https://www.josai.ac.jp/news/20220418-01.html>

3 KDDIは2022.3.31にすでに終了。ソフトバンクは2024.1.31に、NTTドコモは2026.3.31に停波予定

4 鶴ヶ島市富士見地域支え合い協議会事務局山本恵男氏からの聞き取り

た。会場は指定席とし、2人用のテーブルの一方に担当ゼミ生の名前のシールを、もう一方に参加予定高齢者の名前のシールを貼って、サポートする側・される側双方が名前呼び合えるように工夫を凝らした。一応講師はいたが、参加者たちは講師の話聞くよりも学生アシスタントとのマンツーマンでのやり取りを楽しんでいた。

終了後、ゼミ生たちは毎回振り返りのためのミーティングを行った。コロナ禍で途絶えていた学年を超えた対面でのミーティングを新年度早々にできたことは、その後のゼミ活動のチームワークにも良い影響（顔を覚えられただけでも）があったと思う。

2.4 評価

2.4.1 参加高齢者の声（インタビューによる）

- ・「孫のような若い方とお喋りしながらわかりやすく教えていただき、とても楽しかった。」
- ・「家族にはなかなか聞きにくかったが、学生さんが丁寧に話を聞いてくれたので、有り難かった。」
- ・「久しぶりに若い人と会話ができた。何よりそれが楽しかった。」
- ・「スマホの使い方について、学生さんがとても詳しいので驚いた。」

など、学生がマンツーマンで高齢者に寄り添う形でのスマホ教室は、参加者に高く評価されていた。

2.4.2 連携主体（富士見地域支え合い協議会）による評価（インタビューによる）

- ・「スマホでやってみたいことが参加者それぞれで違うし、レベルもバラバラなので、どうしたものかと悩んでいたが、学生がマンツーマンでわかりやすく説明してくれたので助かった。」
 - ・「支え合い協議会のスタッフも高齢者ばかりなので、孫のような年代の学生たちと一緒に企画し、運営できたことで、気持ちが若返った。」
 - ・「会場に学生たちがいてくれるだけで、明るくワクワクした雰囲気になる。」
 - ・「来年度もぜひ一緒にスマホ教室を開きたい。」
- など、連携主体からも高い評価をいただいた。

2.4.3 参加学生の声（インタビューによる）

- ・「教えることができるか不安だったが、わからないところは近くにいるゼミの先輩に助けをもらいながら、何とか質問に対応できた。達成感を感じたし、自信にもなった。」
- ・「高齢者と会話するのは生まれて初めてだったのでとても心配だったが、真剣に聞いてくださったので話しやすかった。コミュニケーション力がついたように思う。」
- ・「意外と自分にもコミュニケーション力があることに気づいた。少し自信がついた。」
- ・「アシスタントと言っても黙っていても始まらないので、自分から主体的に話しかけるようにした。実行できたと思う。」
- ・「アシスタントをしているときも楽しかったが、終了後の振り返りミーティングで先輩たちと語

り合えたのは有意義な時間だった。」

など、参加ゼミ生も概ね高い評価をしている。特に「初対面の人との会話に自信が持てた」という声が多かった。毎回3時間30分以上、初対面の他人と対話するという経験はあまりできないはずなので、そこから得られたものは大きかったように思う。

2.4.4 参考資料

参考資料として、参加ゼミ生が2022年度地域連携活動発表会のために作成したパネルを掲載する。



図 2.1 2022年度地域連携発表会用のパネル（勝浦ゼミ3年上間月乃作成）

3. 「レインボーフェスティバル～世界が川島（ここ）に！」

3.1 概要⁵

【日時】2022年10月1日（土） 10:00～14:30

【会場】カインズモール川島 蔦屋書店前駐車場

【連携主体】埼玉県川越都市圏まちづくり協議会（川越市、坂戸市、鶴ヶ島市、川島町、毛呂山町、越生町）、埼玉東上地域大学教育プラットフォーム（TJUP）、カインズ川島インター店、ブラジル

5 <https://www.josai.ac.jp/news/20221003-04.html>

ストア、アマゾン川島FC、NPO法人川島町国際友好プラザ

【参加ゼミ生数】 勝浦ゼミ生47人

【来場者数】 約5,300人

3.2 経過

埼玉県川越都市圏まちづくり協議会（略称「レインボー協議会」。以下「レインボー協議会」という。）は、埼玉県中央部の川越市を中心に坂戸市、鶴ヶ島市、川島町、毛呂山町、越生町の6市町（設立当初は日高市と含めた7自治体）で構成される広域行政推進の組織である。レインボー協議会は、「第3次埼玉県川越都市圏まちづくり基本構想・基本計画（レインボープラン）」に基づき、公の施設の相互利用、婚活事業、広域防災などに取り組むとともに、構成自治体が順番に幹事となって広域観光のPRや都市圏住民の相互交流を目的に「レインボーまつり」を開催してきた。2022年度はコロナ禍が少し落ち着いたことから3年ぶりに「レインボーまつり」が開催されることとなり、川島町がその幹事となった。

前年の2021年度に勝浦ゼミ生たちが第6次川島町総合振興計画の政策研究員として関わったことなどの縁から、川島町政策推進課から一緒に企画を考えてくれないかとの申し出が勝浦ゼミにあった。3年ぶりの開催であり、これまで実施してきた内容も講演会などが中心で若干マンネリ化の感もあるので、地域活性化につながるような企画を学生たちの新しい発想で考えてほしいとのことであった。

地域の課題を地域の様々な主体の連携によって解決を試みようというソーシャル・マネジメントが勝浦ゼミのテーマなので、川島町をはじめとする6市町、地元の国際交流NPOなどとの連携は、大変ありがたい機会であった。

企画内容については、各学年のゼミで議論を重ねた結果、多文化共生社会に向けた国際ショナルフェスティバルとした。実は、勝浦ゼミでは2015年から2018年まで5回（2015年は春秋2回）国際ショナルフェスティバル（通称「つるがしまるシェ」）を開催してきたが、諸事情や新型コロナウイルスの影響で中断を余儀なくされてきた。ゼミ生たちは動画などで先輩たちの活動をよく知っていたので、イメージしやすかったということもあった。

企画内容は、勝浦ゼミ生たちが提案し、レインボー協議会構成市町との調整を経た結果、次のようなものとなった。

1 目的（一部抜粋）

今回開催する「レインボーフェスティバル」は、第3次レインボープランで掲げる施策「地域や世代を超えた交流の促進」に基づく事業として、地域や世代、国籍を超えた都市圏住民間の相互交流を図るとともに、都市圏の一層の発展や当協議会及び広域観光PRを目的として開催する。

2 名称「レインボーフェスティバル～世界が川島（ここ）に！～」

3 日時 2022年10月1日 10:00～14:30

4 会場 カインズモール川島 蔦屋書店前

5 交通 東武東上線若葉駅から会場までシャトルバスを運行

6 主催 埼玉県川越都市圏まちづくり協議会（レインボー協議会）

7 共催 埼玉東上地域大学教育プラットフォーム（TJUP）

城西大学経済学部勝浦ゼミナール

- 8 協力 カインズ川島インター店、ブラジルストア、アマゾン川島FC、NPO法人川島町国際友好プラザ
- 9 来賓 川島町議会議長、埼玉県川越比企地域振興センター所長
- 10 世界のグルメの出店 12ブース
セネガル、チリ、フィリピン、バングラディッシュ、ブラジル、ペルー、コロンビア
ベトナム、スリランカ、イタリア、アメリカ、パラグアイ
- 11 構成 6市町の出展 6ブース
- 12 地元企業・NPOの出展 6ブース
- 13 地元高等学校の出展 1ブース
- 14 世界のダンス・音楽・ステージショー
パラグアイ・アルパ、ブラジル音楽、カポエイラ（ブラジル）、ご当地ヒーローショー（城西大学経営学部石井ゼミも出演）、チリダンス、セネガル太鼓とダンス、ベリーダンス、アメリカンポップス、ビートルズナンバー、ペルーダンス、サンバ
- 15 想定来場者数 5,000人

3.3 準備

勝浦ゼミ生主体で準備を進めていくので、何よりもチームづくりが重要であり、そこから始めていく必要がある。新年度早々に、実行委員長、副実行委員長、本部チーム、会場チーム、ステージチーム、広報チーム、出店チームの5チームに分けて、希望を募った。1年生はゼミ活動についてよく理解できていなかったことなどから、参加希望はなかった。また、4年生はまさに就活中でもあり、参加希望がなかった。結局、2年生25人と3年生22人の計47人でチーム分けを行い、準備にとりかかることとなった。

実行委員長、副実行委員長を3年生が担うことになったものの、各チームのチームリーダーがなかなか決まらない。それ以前にチーム毎の打ち合わせにメンバーが出席しない、あるいはチーム毎のグループLINEに反応しないという状況であった。何とかチームリーダーが決まったが、3チームのリーダーを2年生が担うという結果となった。

7月中にポスター、チラシデザイン完成、8月中にはグルメ出店者やステージ出演者たちへの説明会2回開催、9月には完成したポスター、チラシなどの配布、当日のパンフ等の作成など、川島町政策推進課を通してレインボー協議会構成6市町と調整しながら準備を進めた。

3.4 当日

レインボーフェスティバル当日は晴天となり、開会式から閉会まで来場者が途切れることなく、大盛況で終わることができた。城西大学地域連携センターもTJUP事務局として活躍してくださった。出展・出店ブースの方々も会場を盛り上げるのに協力的であり、それぞれのブース間でも、来場者間でも多文化交流が盛んに行われた。ステージで繰り広げられた各国の音楽やダンスも盛り上がり、ステージ前では多くの来場者が踊りまくっていた。音楽やダンス、グルメに国境はない。

また、公式来場者数は想定を上回る5,300人と過去最大であった。来場者が想定以上ということは、運営側には様々な場面で臨機応変の対応が求められる。駅から会場までのシャトルバスに乗り切れない来場者、すぐに溢れてしまうゴミ箱、トイレのチェックや掃除、落とし物、迷子、会場案内やそのアナウンス対応など、指示を待っていたのでは対応困難なことが多く、その場での適切な判断が求められる。ゼミ生たちは苦悩しながらもそれぞれ適切に対応していた⁶。

3.5 評価

3.5.1 来場者の声（インタビューによる）

当日の来場者に聞いた感想は、以下のとおりであった。

- ・「学生たちが主体的・積極的に動いていて、好印象を受けた。」
- ・「若葉駅でシャトルバスに乗り切れない人たちからの苦情に対して、本部に確認しながら臨時バスを依頼するなど適切に対応していた。学生でそれができるのはすごい。」
- ・「学生たちが運営しているという姿自体が、参加者をワクワクさせてくれる。」
- ・「受付の学生には丁寧で適切な対応をしてもらい、とても嬉しかった。」

など、参加者には好印象を持っていただいた。

3.5.2 連携主体（川島町政策推進課A氏）による評価（インタビューによる）

<自治体として大学（学生）と連携する目的、意義などについて>

- ・若い学生ならではの企画を取り入れたいというのが目的であった。
- ・実際に多くの来場者の方々に満足してもらえたのは、自治体職員にはない学生の斬新な視点を企画に組み入れられたからだと思う。
- ・自治体主催のイベントに若者が関わることが少ない中、若い世代の活躍の場を地域に設けることの重要性を発見することができた。

<連携して苦労したことについて>

- ・準備段階での連絡調整がスムーズに進まなかった。学生にとっては、本業である学業の合間での対応しかできなかったこと、一方自治体職員としては「仕事」として取り組んでいることのギャップが理由だと思う。
- ・学生の主体性に任せることにしたが、その加減が難しく、一部では進行の遅れからフォローに追われる時期もあった。

<連携したメリットについて>

- ・学生の視点を知り、理解することができた。
- ・川島町には大学が所在していないので、今後の政策立案等の参考になる。
- ・イベント当日、自治体のスタッフだけではとても対応しきれなかった。学生スタッフの存在は大きかった。

6 来場者の評価からも適切に対応していたことが窺われる。

<大学との連携にあたって今後注意した方がいいことについて>

- ・ イベントの準備・実施にあたり役割分担をすることは必要ではあるが、進捗状況の確認と共有は密に行った方がいい。遅れている作業の進行を促すことにもなり、フォローの先手が打てる。
- ・ 学生に決定権を委ねる部分を増やした方がいい。自治体が関係するイベントでは組織という壁など制約が多くなりがちだが、学生のモチベーションを高め、より成長できると思う。

3.5.3 参加学生の評価（振り返りアンケートから）

レインボーフェスティバル参加ゼミ生に対して、後日振り返りアンケートを実施した。ここではその結果の一部について報告したい⁷。

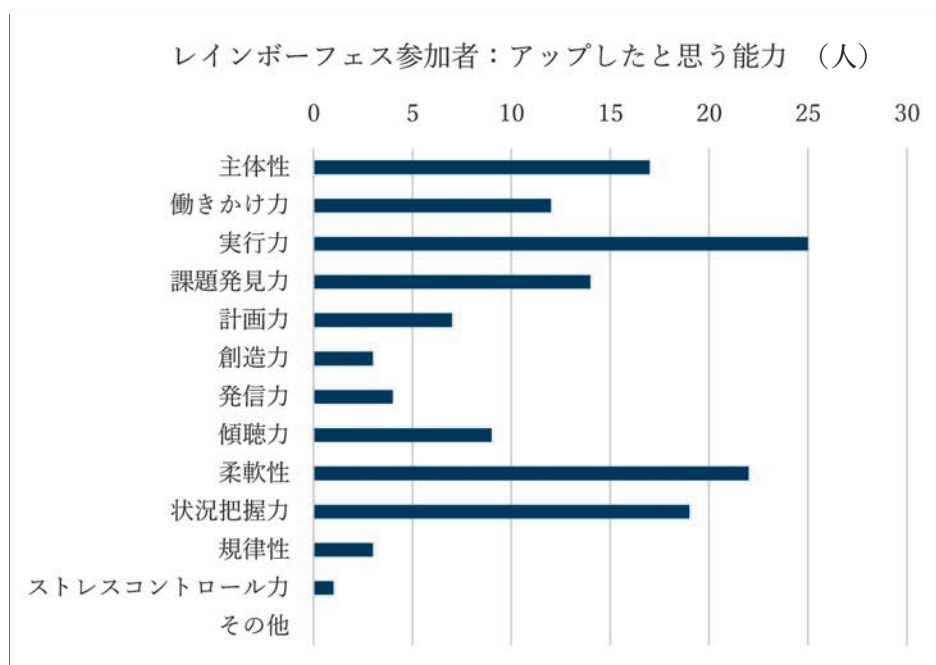


図 3.1 参加したことによりアップしたと思う能力（複数回答 n=42）

7 振り返りアンケートは、ゼミの授業時間に1年生から4年生の出席者全員に対して、各プロジェクトの参加の有無とその理由、今後の参加意向などについて行った。回答者数72人、うちレインボーフェスティバル参加者の回答者42人、長野市りんご農家応援プロジェクト参加者の回答者12人。詳しい分析等は別の機会に報告したい。

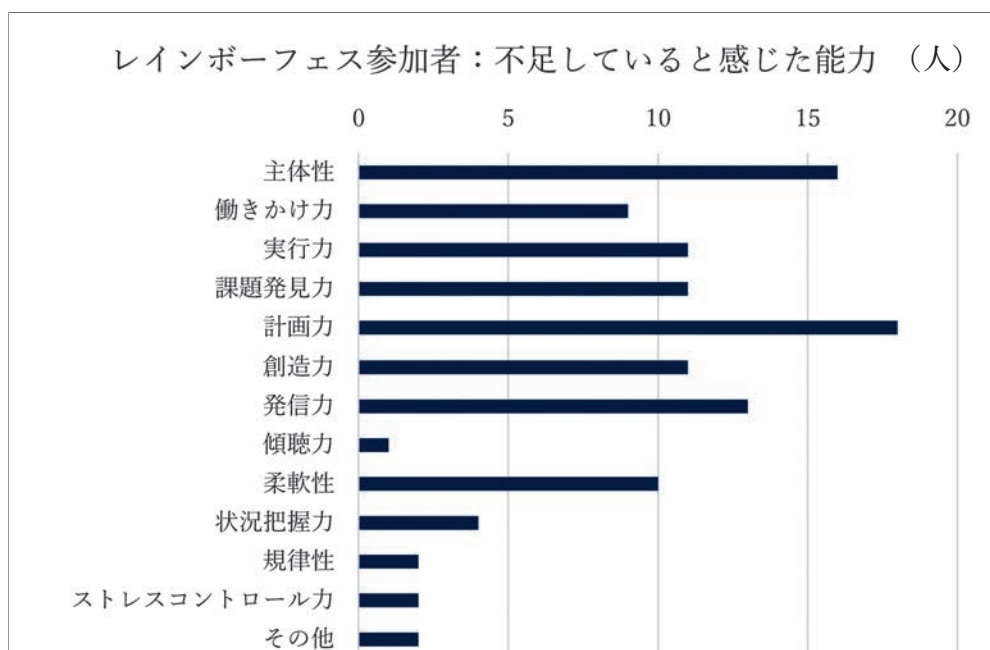


図 3.2 参加してみて不足していると感じた能力（複数回答 n=42）

4. 減災のための長野市りんご農家応援プロジェクト

4.1 経過と概要⁸

2019年の台風19号で長野市のりんご農家が大きな被害を受けたことがゼミで話題になった。その際、「台風が来るのは3～4日前にわかるのだから、一気に収穫してしまえばいいのになぜ収穫してしまわないのだろう」という意見が出た。その声に長野市出身のゼミ生Aが、「りんご農家の多くは中山間地域や過疎地域。りんご畑を管理しているのは高齢者ばかり、しかも、りんごの木に登ったり、脚立を使ったりと大変。りんごは結構重いんだよ。一気に収穫なんて人手が足りなくてできないのが実情」と発言した。

「じゃあ、ゼミで収穫のお手伝いできないかな～」との提案が誰からともなくあがり、Aが知り合いのりんご農家さんをゼミと繋いでくれたのがこのプロジェクトのきっかけであった。

コロナ禍が少し落ち着いた2021年10月9日（土）～10日（日）に第1回を実施し、今回は2回目の実施となった。

概要は次のとおり。

【日時】2022年10月8日（土）～9日（日） 1泊2日

【場所及び連携主体】長野市若穂保科地区りんご農園

【参加費】各自15,000円程度（交通・宿泊費）自己負担

8 <https://www.josai.ac.jp/news/20221013-04.html>

【参加者数】 勝浦ゼミ生14人

【収穫したりんご数】 約5,200個

4.2 準備

手挙げ方式（主体的）で決まった幹事長が、訪問する長野市のりんご農家と調整して日程を確定後、Zoomで2回説明会を開催し参加ゼミ生を募った。参加ゼミ生確定後、りんご農家近くの宿泊施設を予約して、自動車を提供できる参加者を把握し、配車計画を参加者に提示するという段取りで準備した。

前はレンタカーを3台利用したが、自己負担額が高額となってしまった。2022年は交通費を抑えるために自動車を提供できる参加者を募り、乗り合わせで長野市に向かうことになった（同乗者への補償のある任意保険加入が条件）。

2日間のスケジュール、持ち物、服装、注意事項等は、幹事長がりんご農家と連絡を取り合って決定し、参加者に共有した。昨年同様、感染予防を徹底すること、検温チェックとワクチン接種済みであることを参加条件とした。

4.3 1日目・2日目

1日目は、7:00に坂戸駅南口に集合してりんご農家の所在地と行程を確認し合ってから分乗して出発した。途中、LINEで互いの現在地を確認し合いながら、10:30に長野市のりんご農家に無事到着。到着後、りんご農家の方から、収穫した方がいいりんごと収穫するには早すぎるりんごの見分け方、枝からの取り方、園芸用3本脚立のセットの仕方などの簡単なレクチャーを受けた。参加ゼミ生たちは、脚立に上ってりんごを枝から取る者、取ったりんごを受け取ってカゴに入れる者、カゴに入れられて集められたりんごをコンテナにきれいに収める者など、自主的に役割分担、チーム分けをして収穫に取り組んだ。

1日目は16:00過ぎに終了し、須坂温泉の宿に向かった。宿に着く頃には辺りはすっかり暗くなっていた。入浴や夕食会場、その後の各部屋での語りの場では、学年を超えて懇談することができた。このような機会はコロナ禍ですっかり失われた貴重なものであった。

2日目は、朝4:00に起きてセルフ・ウォーク・リレー⁹のためにウォーキングに出かける学生たちもいた。全員が早々に朝食を済ませて出発、9:00にりんご農家に到着した。2日目となれば、役割分担にも慣れ、チームワークも向上して効率的に収穫を進めることができた。2日目の作業は正午で終了にした。昼食では、りんご農家の方々が手作りの信州そばや漬物、おやきなど、学生ならもっと食べられるだろうとたくさんご用意していただき、すっかりご馳走になった。

また、りんご農家の方からは心から感謝しているとの言葉を頂戴し、お土産として収穫したりんごを好きなだけ持ち帰らせていただいた。参加ゼミ生にとっては充実感と達成感を感じることができた2日間であった。2日間で収穫したりんごは、5,200個であった。

9 勝浦ゼミ生たちは、9/18~10/17の1ヶ月間、合計歩数のがん患者支援のための寄付につながるセルフ・ウォーク・リレーというプロジェクトに参加していた。

ゆっくり昼食を味わった後は早々に帰路についたが、観光シーズンの日曜日の上りとあって渋滞に巻き込まれながらも午後6時過ぎには坂戸駅南口に全員無事到着することができた。

4.4 評価

4.4.1 参加ゼミ生の声（インタビューによる）

参加した学生に聞いた感想は、次のとおりであった。

- ・ 普段、当たり前のようにスーパーに並んでいると思っていた野菜や果物だったが、今回りんごの収穫を体験して、栽培から収穫・出荷、市場を通してスーパーに並ぶまでの多くの関係者の方々のご苦勞にありがたみを実感した。収穫だけでも大変な苦勞がある中、生産者の方々には「いつも美味しい野菜や果物をありがとうございます。」と感謝を伝えたい。
- ・ とにかく楽しかった。空気もすごく美味しかったし、農家の方や仲間たちと協力しながらの作業はとても充実した時間だった。
- ・ 人口減少、高齢化は、私たちの生活にもっとも大切な農業など一次産業の分野でより深刻な問題になっていることを実感できた。
- ・ 来年も絶対参加したい！

なお、幹事長の感想は、以下のとおりであった。

- ・ この活動により、「行動力」「主体性」「推察力」「チームワーク力」「思考力」が大きく成長した。どういう大変さがあるのか、今自分にできることは何があるのかを考え、仲間と協力することによって社会人基礎力の向上につながったと感じる。例えば、りんごがなっているところを初めてみるゼミ生がほとんどだった。そのため、初めはどのりんごを採って、どのりんごを採らないのかといった色づきの判断がわからず、自分では決められなかったが、2日目はひとりひとり黙々とりんごの収穫に励む姿があった。また、各々が脚立をどう掛ければよいかなど試行錯誤する機会が多かった。そして、りんごを採る人と採ったりんごを受け取る人で2人1組になり、協力し合う姿も見られた。活動を通して、ひとりひとりが達成感、充実感を感じられ、大変有意義な時間を過ごせた。
- ・ りんご農家の方々に対しては、感謝の気持ちでいっぱいである。参加ゼミ生からもりんご農家への「感謝」の声が多く聞かれた。普段、私たちが当たり前だと思って食べている食材の背景には汗水流しながら一生懸命育ててくださった農家さんの丹精が込められていることを身をもって実感できる活動であった。

4.4.2 参加ゼミ生の評価（振り返りアンケートから）

長野市りんご農家応援プロジェクト参加ゼミ生に対して、後日振り返りアンケートを実施した。ここではその結果の一部について報告したい。

レインボーフェスティバル同様に、社会人基礎力の12の能力要素に関する調査となっている。

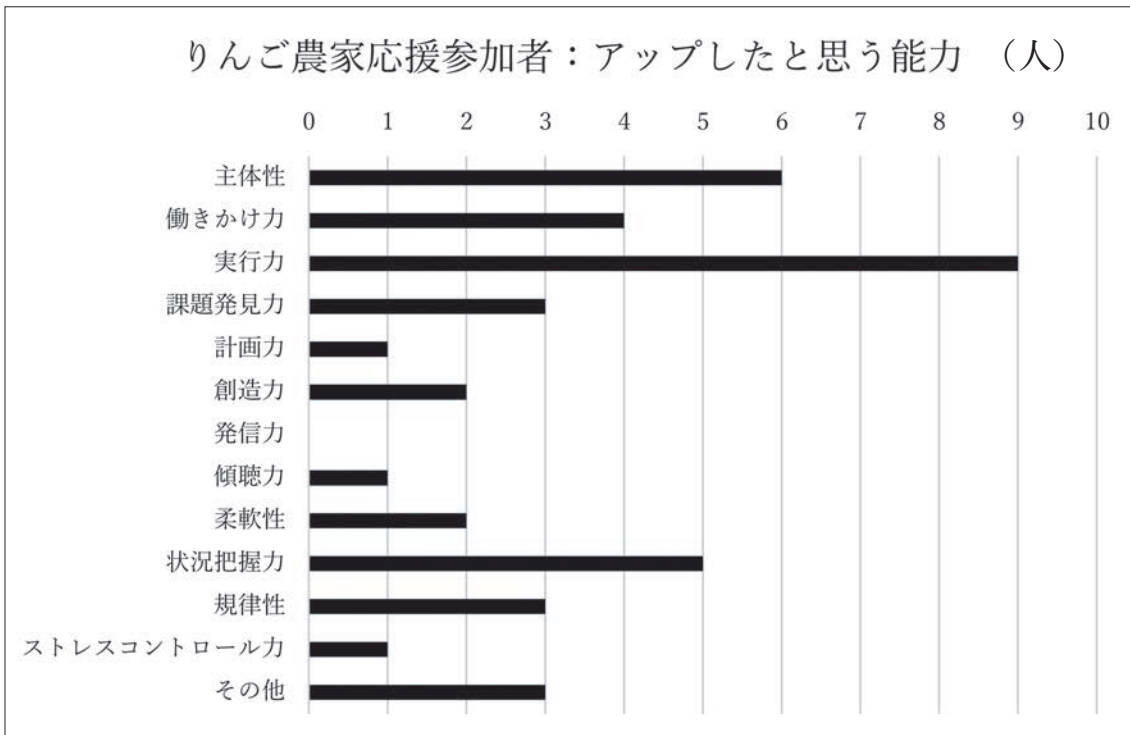


図 4.1 参加したことによりアップしたと思う能力 (n=12)

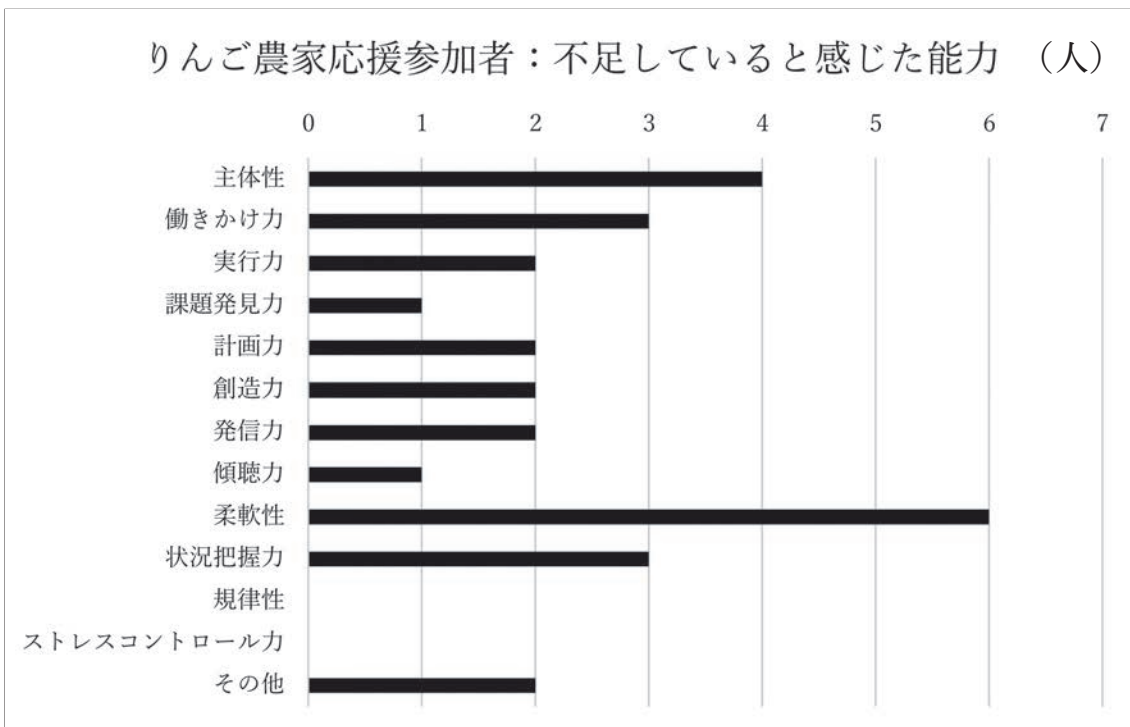


図 4.2 参加してみて不足していると感じた能力 (n=12)

5. 簡単な考察と地域連携PBLの課題

5.1 簡単な考察

2022年度に行った勝浦ゼミの主なプロジェクト¹⁰について、その概要と参加ゼミ生たちの声などについて報告させていただいた。勝浦ゼミ生たちは、プロジェクトを通して各自成長できた能力とまだまだ不足している能力を自覚することができたようである。

レインボーフェスティバルについては、長い準備期間（5月から9月）の中での滞りがちとなってしまった進捗への反省から、「計画力」「主体性」「発信力」の不足を自覚したようである。一方、レインボーフェスティバル当日は、想定を超える来場者やさまざまな要望が飛び交う現場での臨機応変の対応に自信を深めることができたことから、「実行力」「柔軟性」「状況把握力」がアップできたと自覚したと考えられる。

長野市りんご農家応援プロジェクトについては、りんご収穫経験のないゼミ生が9人だったこともあり、実際にりんごを収穫したという体験それ自体が「実行力」「主体性」がアップしたという自覚につながったと考えられる。不足を感じた能力として「柔軟性」「主体性」が挙げられているが、事前準備を幹事に任せてしまったことなどに起因していると考えられる¹¹。

年度当初と年度末に実施している生きる力（社会人基礎力）調査、プロジェクトの振り返りアンケート、リアクションペーパーなどによる詳細な分析については、改めて別の機会に報告させていただきたいと思う。

5.2 課題

地域連携PBLによる学生の成長については、さまざまな先行研究からもその有効性が明らかにされている¹²。しかしながら、地域連携PBLを拡大していくには課題もある。

課題の一つは、地域連携PBLを実践しているのが一部の教員のゼミや科目に限られていることである。一部の教員に過重な負担となっているとも言えるが、学生にとっては参加の機会が限られてしまうということが問題である。一方、地域連携に取り組むゼミなどに所属した学生の負担も大きくなってしまふ。少人数のチームで取り組むべきプロジェクトもあるが、活動内容によっては、多数の学生で取り組む必要が生じてくる。レインボーフェスティバルでは47人のゼミ生がフル活動した。りんご農家の応援でも参加する学生の人数が多ければ短期間に収穫できる量も多くなる。城西大学の学生であれば誰でも、興味のある地域連携PBLに参加し、他者との活動の中で社会人基礎力を身につけていく機会を得られるということが望まれる。

ボランティア、サービスマーケティングなど地域連携活動の実践に取り組んでいる科目が学部ごとにあ

10 2022年度は他に、東京都中小企業紹介プロジェクト、がん患者支援のためのセルフウォークリレーなどを行った。

11 2つのプロジェクトは終了直後にリアクションペーパーを提出してもらっている。そこに記されたワードからもこのことを推測することができる。

12 勝浦2019、山口2020など

るが、それらを統括して全学部共通科目（例えば「地域協創実践」など）にはできないか。地域連携センターに専門の「地域連携コーディネーター」を配置¹³し、学生たちとともに複数の地域連携プロジェクトを企画運営していくことができないか。検討していく意義があるように思う。

課題のもう一つは、参加学生への支援である。振り返りアンケートの結果では、参加しなかったが参加できなかった理由として交通宿泊費の負担が大きな壁になっていたことが明らかになっている（特に長野市りんご農家応援プロジェクト）。他大学のように地域連携PBLに参加する学生への経費支援¹⁴なども検討する必要があるように思う。

コロナ禍で内向き姿勢になってしまいがちな学生たちが、地域の大人たちとの協創によって成長し、将来、社会で活躍してくれることを願ってやまない。

参考文献

- 1) 荒木昭次郎 (1990) 『参加と協働』 ぎょうせい
- 2) 井関利明・藤江俊彦 (2005) 『ソーシャル・マネジメントの時代－関係づくりと課題解決の社会的技法』 第一法規
- 3) 大室悦賀 (2014) 「ソーシャル・マネジメントの確立と社会的影響」『京都産業大学総合学術研究所所報』9, 177-186
- 4) 勝浦信幸 (2019) 「地域連携PBLにおける学修成果の可視化について」『城西大学教職課程センター紀要』3, 45-60
- 5) 山口泰史 (2020) 「大学教育におけるPBLの実践と地域課題解決への貢献」『産学連携学』Vol. 16, No2, 1-10
- 6) 文部科学省 中央教育審議会 (2016) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) (2023年1月14日)
- 7) 文部科学省 (2013) 『平成25年度 地（知）の拠点整備事業』 公募要領
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/04/15/1332621_01_3_1.pdf (2023年1月14日)

13 専門の地域連携コーディネーターを設置する大学も多数ある（立正大学、十文字学園女子大学、福知山公立大学、和歌山大学、富山県立大学など）。

14 帝京大学経済学部地域経済学科では、ゼミ活動に関して学生1人3万円まで補助が出るという。